

## 文集『鉢の子』の話

福島 みゆき  
ふくしま みゆき

今から二十八年前、山口の過疎の農村で「読書会」を始めた。当時自宅で家庭

設で働いている社会活動家の人、海外勤務の長かった人など。

由律句の山頭火を取り上げたので、彼の句集名に因んだ。

文庫を運営していて、その縁でいろんな集会のパネラーとして発表する機会があった。そのとき一緒に壇上にいた人が

月に一回、地元の公民館の図書室で同じ本を読んできて感想を語り合うことになった。

私が原稿を集めてワープロに打ってくれる人に渡した。彼女はいつも快く引き受けて、とても誠実に仕上げてくれた。

地域で「読書会」をしているというのを聞き、私もやってみようと思った。でも土地柄か、そういう活動に参加しようという人は少なく、人集めはたいへんだっ

た。当番を決めて本を選び、参加者に配本した。当時県立図書館にある読書会用の蔵書を利用することが多かった。後半は新書など安価なものを各自購入したりした。

紙は、紙問屋に買いに行った。それらを編集してまとめると公民館の事務局に印刷してもらった。そして文化祭直前の「読書会」のときにみんなで冊子の形にした。

集まったのは、たまたま当時わが家に来て作業していた畳屋さん、息子の中学の国語の先生、息子の同級生のおかあさん、郷土史の研究をしている人、福祉施

は、第一回の「読書会」で山口出身の自

そして年一回、随筆などを書いて「文集」としてまとめ、地区の文化祭で配布することになった。『鉢の子』というタイトルは、第一回の「読書会」で山口出身の自

いちばん大変なのは原稿集めだった。

締め切り日までに集まったのはいつも一人か二人だけだった。二回、三回と催促してやっと最後の原稿が届くと本当に

ホツとした。二回めの催促のとき速達で出すと大抵の人はびっくりして慌てて持ってきたものだ。

でき上がった「文集」を手に取ると毎回達成感でいっぱいになった。まさにみんなの手でつくり上げたものだ。拙いものではあったけれど、農村に住む庶民のおもいがこもったものだったと思う。

Aさんは敬虔なクリスチャンで、強硬な反米、反天皇制論者だった。Bさんは東大を出て大企業の重役として世界を渡り歩いた。女性経験豊富なことをいつも自慢していた。でも彼の選んでくれた本は面白いものが多かった。Cさんは不器用だが独特の人間味ある文章を書いた。Dさんは話し出したら止まらなくなった。発達障害と自分で言っていた。野鳥の研究者としても知られていた。Eさんは研究熱心だがとっても頑固で、自説を絶対曲げなかった。私も含めて変人、奇人が多かった。そのせいかなかなか輪は拡がらず、文集の原稿は書いてもらえるのだが、例会に参加する人は少なかった。

でもなんとか五、六人で毎月集まり、

三十年近く続いた。思想、趣向がバラバラなので話し合ってもなかなかまとまるということとはなかったが、それなりに和気藹藹とした親しみを感じながら淡々とやってきた。いちばんのたのしみは「文集」をつくった後の年末の忘年会。はじめは公民館の和室で各自持ち寄りで開いていたが、使用が厳しくなりお店を利用した。

ところが、今夏私は体調が悪くなり、ついに「読書会」をやめることになった。いろんな人から続けてほしいと懇願された。せめて「文集」だけは出せないかも言われた。辛かったが、どうしても自信がなく期待に応えることができなかつた。

私が思っていた以上に、「読書会」や「文集」を地域の人たちがたのしみにしてくれていたことを知った。これまでやってきたことは無駄ではなかったのかもしれない。

私は「読書会」に参加することで集中して本を読むようになった。私一人では知らなかった世界も知ることができた。感想を語ることや文章を書くことで自分

の考えをまとめ発表する力がついたと思う。

いま、私は別の形で体調の許す範囲で新しい『個人通信』のようなものを出せたらと思っている。時代はどんどん進化する、デジタル化しているけれど、自分の手の届く範囲で考えてみたいものだ。

